

ケニア国ナイロビ近郊植樹祭



植樹地造成中の RAILA EDUCATION CENTER

2022 年 5 月 14 日、ケニア国ナイロビ近郊 RAILA EDUCATION CENTER という小学校で、植樹祭が行われました。

指導されたのは、当会理事で横浜国立大学名誉教授の藤原一繪先生、プロジェクトを助成してくれたのは、公益社団法人国土緑化推進機構です。

本来、2021 年 10 月に、日本からの植樹ボランティアを募って、現地で一緒に植樹をする予定でしたが、コロナウィルス感染拡大の第 5 波、第 6 波の影響を受け、植樹時期を移動、また日本からの植樹ボランティア隊の派遣

も中止を余技なくされました。

現地で雨期の 5 月、コロナウィルス感染の波がまだ続く中、研修者として渡航可能な藤原先生はケニアに赴き、植樹祭が挙行されました。それまでには、苗木の手配、植栽地の造成作業が行われ、藤原先生は植樹のノウハウをパワーポイント使用で生徒に説明、日本で作られた植樹テキストも生徒たちに配布されて準備万端、当日は藤原先生の直接指導で 3000 本の苗木が植樹されました。



植樹地の造成



苗の保管



石碑



横断幕



植樹する生徒さんや関係者



横断幕の前で記念撮影



指導される藤原先生



← ↑ 生徒さんが描かれた動物の絵

第 16 回筑波山水源の森づくり植樹祭開催



2006 年の調査時からご指導下さった宮脇先生の写真は
2007 年 9 月の植樹祭の時の写真です。



本郷浩二元林野庁長官



藤原一繪横浜国立大学名誉教授

耳を傾けました。同神社から山林内での安全祈願のお祓いを受けて、植樹地へ。途中、運搬用のカゴに分配された苗は参加者各自で植樹地まで運びます。幼児からシルバーエイジまで、頑張って植樹地で苗を植えました。



入山途中で、苗、移植ゴテ、軍手の受け渡し、各自が苗を運搬



間伐材で土留めを施した植樹地に苗を植える

2022 年 6 月 5 日、筑波山神社林内にて、第 16 回筑波山水源の森づくりが開催されました。コロナウィルス感染拡大の影響を受けて、2019 年 10 月 27 日の改元記念植樹祭を行って以来 3 年目の植樹祭となりました。世の中の活動のやっと再開という機運もあって、当日は約 300 名の参加者が神社境内に集まり、朝方の小雨も開会式前にやんで、絶好の植樹日よりとなりました

この植樹祭はパタゴニア



隋心門境内で上野貞茂宮司の挨拶を聞く参加者



吉村和就グローバルウオータ・ジャパン代表



茨城、埼玉、千葉、首都圏などからの参加者 302 名の集合写真



植樹地全体を間伐材の葉でマルチングして終了(苗を寒暖から守り、雑草も生えにくい)



The Japan Times 7月号に植樹祭の様子が掲載されました。

Four-year forests:: The Japanese way to 'rewild the world'

同誌記者の Joan Bailey さんは、当日の植樹祭に早朝より参加、日本での宮脇方式による事例とひとつとして、この植樹祭の内容が3枚の写真と共に掲載されました。フランスの Nantes という町での小さな植樹祭の記事に興味を持った Hannnah Lewis さんという人の言動から始まる記事は、宮脇先生による“Miyawaki Method”の植樹方法こそが、緑環境再生の一番の方法なのではないかと示唆している記事です。藤原先生の宮脇方式の理論を述べる言葉がその裏付けとして紹介されています。全文は当会ホームページからダウンロードできます。



茨城新聞の木村優斗記者も同日、早朝より植樹祭に参加、綿密な取材内容が、6月21日の記事となって掲載されています。→

当日の様子は、この他に、月刊カレント7月号、NPO 法人明るい社会づくり運動発行の HEARTFUL 夏号、NEWS つくばにも掲載されています。

脱炭素化を目指して、植樹は世界規模で必要なことです。小さな緑の塊があちこちに増えていくことで、やがて大きな脱炭素への力となるよう、植樹候補地などありましたら、是非お知らせ下さい。

茨城新聞
2022年(令和4年)6月21日 火曜日

人工林に広葉樹の苗木

スギ林の中で広葉樹の苗木を植える植樹会の参加者＝筑波山

筑波山の植生を自然に近い状態に戻そうと、つくばみらい市のNPO法人「地球の緑を育てる会」が始めた植樹会「筑波山水源の森づくり」が17年目を迎えた。山麓に自生する広葉樹の実を拾って苗木を育て、スギやヒノキの人工林の中に植えてきた。針葉樹と広葉樹が交じった姿を目指す息の長い取り組みだ。理事長の石村章子さんは「自分たちでできることを行い、責任を果たしたい」と話す。

筑波山神社などによる同神社の管理する林は約375畝。輸入材が増えた影響で木材の利用が伸び悩み、間伐などの手入れも難しくなっていた。「育てる会」と神社で協議し、植物生態学者で横浜国立大学名誉教授の宮脇昭さん(故人)を顧問に迎え、スギやヒノキに偏った森から自然な森への転換を目指して植樹が始まった。

同会では傷んだり生育が悪かったりするスギを自分たちで伐採し、代わりにタブノキやシラカシといったその土地に合った広葉樹の苗木を植える。「宮脇方式」と呼ばれ、国内外で成果を上げてきた方法だ。育てる会ではこれまでに約5千人が参加し、企業・団体による植樹を含め約4万5千本を植えた。石村さんは専門家の意見を聞いて切るべき木を決め、土地の生態系に適した木を植えている」と説明する。

新型コロナウイルスの影響で3年ぶりの開催となった5日の植樹会には、全国から約300人が集まった。女体山の登山道からスギの木が立ち並ぶ斜面に分け入り、スギやヒノキやヤマザクラ、山火事で延焼を防ぐ効果のあるタブノキなど広葉樹10種の苗木計千本を新たに植えた。

東京都内から書道教室の仲間と来た三浦佳大君(10)は「今は小さいけれど100年後には他の木みたいに大きくなると思うと感動する」と笑顔。石村さんは「未来の子どもたちを守るためにも、植樹を通して元の生態系に少しでも戻していければ」と力を込めた。

(木村優斗)

筑波山「自然の姿に」

つくばみらいのNPO 植樹活動17年目